

2014年 和本で見る日本書物史

第3回 書物の歴史 平安 物語と冊子本

『源氏物語』の原本に至るまで

橋口 侯之介



日本人の書物観を説くとき平安時代を重視しないわけにはいかない。そこに現代に通ずる様々な工夫と努力が重ねられてきたからだ。

『源氏物語』の原典は不安定である。紫式部自身の草稿も失われ、勝手に書き換える人がいた。それが平安時代の物語文学の姿でもある。

『源氏物語』は書かれた11世紀当時の写しが残存しない。それから200年後くらいの本から少しずつ残っているのが現状だ。その残存する古い本からだけではまだわからないことが多い。本の形態が発展過程で流動的な時期だったからだ。そこで、そうした事情も念頭に入れて装訂、文字のありよう、紙のことなどの歴史を振り返り、11世紀の書物を復元することにする。

「正式な」書物は真名の卷子本だった時代

11世紀当時の日本では、正規の書物は巻物＝卷子本かんすほん（けんすほんとも）にして保管することが義務づけられていた。漢籍くぎょうはもちろん、政治や法制上の文献、仏教経典やその解説をした典籍類、朝廷を取り仕切っていた公卿くぎょう（三位以上の高級貴族）たちの日記など、基本的に巻物にした。歌集もとくに勅撰集は卷子本である。中国で唐代までの主要な装訂法だったからである。また卷子本にするものは歌集をのぞいて基本的に真名まな（漢文）で書くことが正式だった。

公卿の日記

公卿は儀式や慣例を記録しておくために日記を書いた。個人のための覚えでなく、子孫に家の記録を残しておくためである。慣例を重視する仕組みでは、それが重要だった。日記は具注暦の余白くわいしやくに書き入れる。この暦は毎年11月に陰陽寮おんみょうで作成されて諸家に下される。半年分で一巻（年二巻）にするのがふつうである。日ごとの吉凶などが書かれた項目があって、二、三分に分けてあったま（間明き）。そこに各自がその日の出来事を漢文体で書いた。日記は朝書くもので、具注暦を開くとその日の吉凶がわかるので、それを知り、昨日あった公的な出来事を書く。余白はそう大きくないので簡潔に漢文で書くのだ。そのため、事務的な内容になってしまうので、女性たちが残したいいわゆる仮名の日記文学のようなわけにはいかなかった。

南北朝時代の具注暦。中原師守の日記(国会図書館蔵)



卷子の様子

『源氏物語』梅枝から

延喜の帝の古今和歌集を、唐の浅縹の紙を継ぎて、同じ色の濃き紋の綺の表紙、同じき玉の軸、緞の唐組の紐など、なまめかしうて巻ごとに御手の筋を変へつつ、いみじう書き尽くさせたまへる

『源氏物語』絵合から

物語の出で来はじめの祖なるたけとりのおきな（竹取の翁）にうつほのとしかけ（俊蔭）は……白き色紙、青き表紙、黄なる玉の軸なり。絵は、常則、手は、道風なれば、今めかしうをかしげに、目もかかやくまで見ゆ

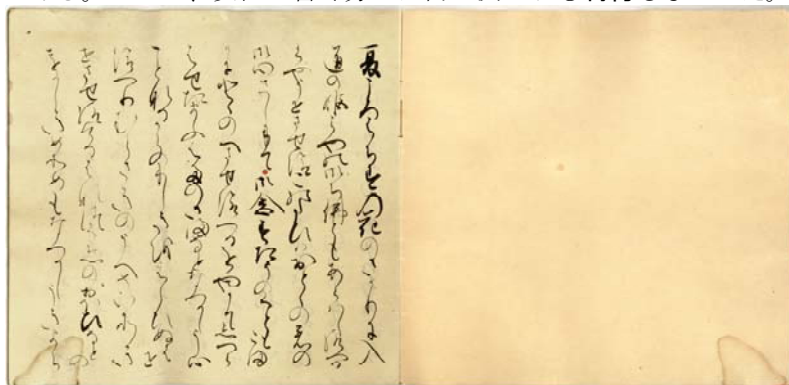
『土佐日記』紀貫之自筆本の様子（藤原定家）

料紙白紙 不打無堺 高一尺一寸三分許 広一尺七寸二分許紙也 廿六枚 無軸
表紙続白紙一枚 端聊折返不立竹無紐 有外題 土左日記 貫之筆
其書様 和哥非別行 定行に書之 聊有闕字 哥下無闕字而書後詞

物語の誕生 仮名で文学表現という「発明」

『万葉集』で万葉仮名が使われたように音を漢字にあてて日本語を表現した。それが平安時代は和歌になる。その過程で平仮名が考案された。漢文を補助的に読むために片仮名もできた。漢字は男文字、平仮名は女文字とされた。しかし、漢文では日本人のコミュニケーションにならない。日常語（口語のような）に近い言葉で語るほうが人の生き様や情感を語りやすい。そこから発展して、物語や日記を平仮名で書くようになる。仮名は女文字だったので、男が使うときにはわざわざ紀貫之の『土佐日記』（935年頃成立）の巻頭「男もすなる日記といふものを、女もしてみむとてするなり」と述べているのはそのあらわれである。しかし、女性が書く分には何の決まりも制約もなかった。

文章の叙述に仮名を用い
デアは確実に新たな展開
た。それが西暦1000年頃
氏物語』を生んだのであ
物語とは、「もの」を語る
「もの」とは、人間界の
恨み、恐怖などが人知の
い物の怪などの悪霊がい
れが人に祟る考えられて



るアイ
となつ
の『源
る。
こと。
嫉妬、
及ばな
て、そ
いた。

それを人に語ることで怨霊を鎮めることができるとされた。それが物語の本来の姿である。

始めは文字通り人の口から発せられていったが、文章で人に伝えるようになる。「もの」の具体相を語るには漢文では無理で、仮名を使って叙述する。当時は音読をしていたと想像される。

なぜ、女性が物語を書いたのか

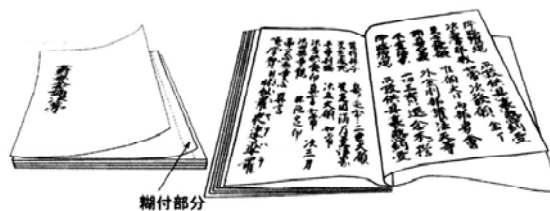
漢文のの制約を受けない女性だからできる発想があった。平仮名を用いて和歌をはじめ日記や随筆、物語を書いた。物語はいわば平安貴族のエンターテインメント。日常語で自由に書けたので、複雑な人間関係、その間の心理的描写など深い感情が表現でき、時代を超えて読者に訴え続ける力をつけた。

藤原道長『御堂関白記』などは、歴史の史料としては信頼度が高いとされているが、「おもしろい」ものではない。仮名の『紫式部日記』は、激しい感情まで表現している。

西暦1000年頃からの随筆の『枕草子』（清少納言）、日記では『紫式部日記』、『和泉式部日記』、『更級日記』（菅原孝標女）、『蜻蛉日記』（藤原道綱母）、そして『源氏物語』は女性の書き手によるものである。

卷子から冊子へ

女文字であることは、漢文ではないので卷子本にする必要がなかった。冊子が最もふさわしい形態といえた。文字や絵の書かれた紙を料紙（りょうし）という。その料紙を糊で何枚も横につなげたのが卷子本や折本だった。それに対して、一枚ずつ製本したものを冊子（サクス、さうし）という（中国では葉子）。



料紙を半分に折りたたみ、背中の部分を一枚ずつ糊付けして冊子状にし、表紙を貼り付ける製本の形を粘葉装（ねんじょうそう）^{でつちようそう} 装^{こちようそう} といった。中国ではこれを胡蝶装（こてつそう）^{そうはん} 装^{そうはん} といふ。宋代ではこの形の宋版（宋の時代の印刷物）の主流となった。

粘葉装の初期の物として確認できるのは空海（くうかい）^{たちばなのはやなり}（と 橘 逸勢）の中国での修行のさいに書き留めておいた（いわばノート）である『三十帖冊子』が現存する。

『源氏物語』の最初の本とは

紫式部は宮中で自分の物語を本にして配ることをした。日記によると

おまへ(御前)には、御さうし(草紙=冊子)づくりいとなませ給ふとて、あけたてば、まづ向ひさぶら(侍)ひて、色々のかみ(紙)えりととのへて(選り整へて)、ものがたり(物語)のほん(本)どもそへつゝ、ところどころにふみ(文)かきくばる。かつはとぢ(綴)あつめしたゝむるをやく(役)にて、あかしら(暮)す(右図の『紫式部日記傍注』より)

お仕えしている中宮様が**草紙**を作りたいとおおせなので、朝早くから伺候して、各種の**色々な染紙**を選び用意して、源氏物語の草稿(**本**)を添えて、ほうぼうの能書家手紙を添えて清書を依頼した。集まったところでそれらを**綴り集めて仕立てる仕事**で暮らした(橋口意訳)。

色々な紙とは

写経は白紙に書いてはいけないので、キハダや藍で染めた紙に書いた。その染め紙を各種にして、色の組み合わせを楽しんだ。平安貴族や女性たち(女房)は衣服でもお気に入りの色のバリエーション(襦かさねという)を選んだ。

そのセンスのよい美しさがあったので、後世の憧れとなった(これをくくみやび雅とといった)。

紙屋紙

平安時代、朝廷の中に紙を生産する紙屋院が置かれた。当時の最高級紙をつくった。これを「紙屋紙(かみやがみ、かんやがみ)」といった。材料は奈良時代からあった**コウゾ(楮)**と**雁皮(がんび)**で、前者は「まゆみ紙」などととって貴族の男性の懐紙(かいし、常にそばに置いて思いつけばそこに歌を書いていく)や書籍用紙となった。雁皮を材料にした紙は、「斐紙(ひし)」とって、光沢があつてきめが細かく、なめらかな紙である。書きやすく、また虫害を受けにくい特長があつた。厚手のものを厚様(あつよう)といい、両面に濃い墨で文字を書いても裏写りがしなかつた。薄いのを薄様といい、さまざまな色に染められて女性たちの懐紙となった。

染紙

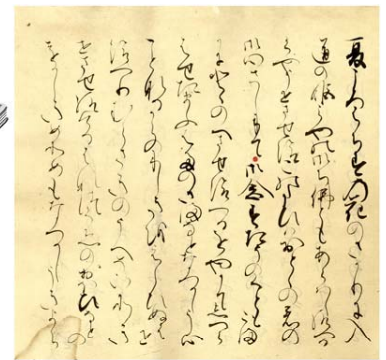
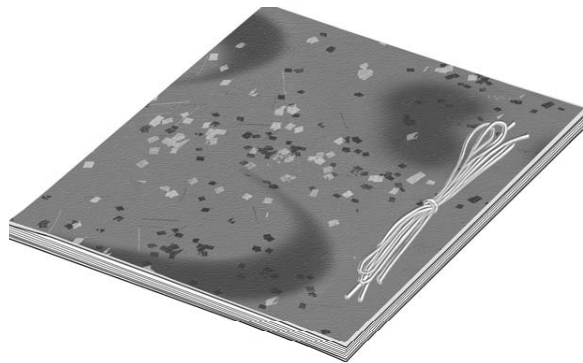
写経は白紙に書いてはいけないので、キハダや藍で染めた紙に書いた。平安貴族や女性たちは衣服でもお気に入りの色のバリエーションを楽しんだように、薄様を染めて色の組み合わせを楽しんだ(かさねという)。『紫式部日記』に「色々のかみ(紙)えりととのへて」とあるのがこれが染め紙である。これを能書家に渡して書いてもらったのだ。これらの紙は丈夫で、保存がよければいつまでも残ることがすでに実証済み。

結び綴 大和綴

『紫式部日記』に「とちあつめ」とあるのは「綴り集め」ということである。綴じるのは糸などで縫うことをいい、糊で貼っていくのと微妙に違う。『枕草子』に「薄様の草子。村濃うすようのいととしてをかしくとちたる」という一節がある。「薄い紙に書いた草子の村濃むらごの糸(濃い色と薄い色で染めた糸)で優美に綴じたもの」ということで、

糸を使って綴じている。書かれた紙を丁寧に折り重ねて、そのノドのところをきれいな糸で綴むすじる方法で、**結び綴**という(いまはこれを**大和綴**という)。これは技術的に容易なので個

人でもできる製本方法である。表紙や糸にセンスのよい選択をすれば、美しい本ができあがる。『紫式部日記』に出てくる草子はこの方法ではないかと私は想像している。



糊は虫を寄せ付けて虫害のもとになるので避けたかった。組糸にすると丈夫さでは糊以上、紐が切れたら取り換えればよい。紫式部にできた製本はこれだろう。

〈本〉と〈草〉

冊子を「さうし」と読んだ。卷子の反対語である。本物の書籍とは扱われないので草子・草紙・双紙とも書いたどう書いても意味は同じである。そこから自由な発想が生まれた。

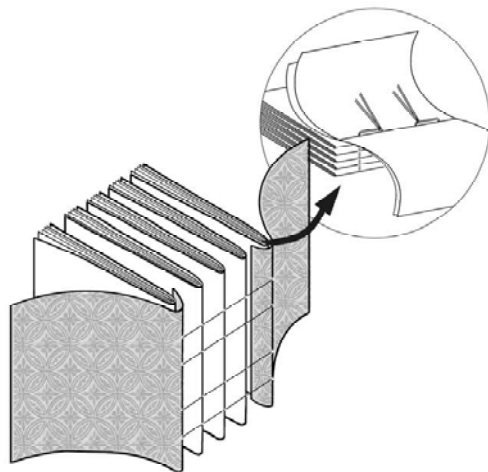
日本の伝統的書物（つまり和本）は、しっかりした内容の（いわゆる堅い本）を〈本〉といい、大衆的でとるにたらないと考えられていた読み物の類を〈草〉と違って区別してきた。

江戸時代には、それをつくる本屋の格の違いもはっきりしていた。その〈草〉の側の本を〈草紙〉といった。その起源は、西暦1000年すなわち『源氏物語』が生まれたときのことである。

列帖装

製本部を強化するために、糊のかわりに糸でかがる方法のほうが良いが、これを丈夫で見栄えの良い方法にしたものが出現した。これを^{れつちようそう}列帖装^{てつようそう}という。綴葉装ともいうが、用語は近代に入っつけられた学術用語で、当時のことばではない。

料紙を内側に二つ折りにするところまでは粘葉装と同じで、今度はその料紙を数枚重ねて中央で糸を使って綴じる（中綴。その数枚ずつの折をいくつかまとめて、さらに糸でからめて一冊に綴じあげる。料紙を一部削って糸を通し、縫い目部分が見えないように工夫したり、表紙を一折目と最終折に織り込むなど技術のいる製本法である。



現存するものとしては平安末期の元永三年（1120）に書かれたとされる『元永本古今集』といわれ、おそらく12世紀に入ってから実用化されたと思われる（したがって『源氏物語』の時代にはまだない）。列帖装はその後も公家や大名などが歌集や物語の写本をつくるときに用いており、江戸時代まで続いた。

源氏物語が今も読み継がれるのは？

平安時代には、もっと多くの物語があっただろう。しかし、大半の物語は今と同じように短い間に消えてしまった。また、正しく写しているとは限らない。とくに物語の場合、写す者が意図的に改変してしまうことも多々あった。そこで重要なのは、すぐれた文学観にもとづいた取捨選択と、正確なテキストの保存である。鎌倉時代のはじめの公家・藤原定家（1162-1241）がそれを行った。各種の物語・和歌集の注釈と正確な伝本の整理をおこない、善本（証本しょうほんという）を残そうとしたのである。この定家の自筆本は残っていないが、次の時代には多くの人がそれを書写してきた。今日、『源氏物語』をはじめ1000年前の物語が読めるのは、この間に多くの人が本を伝える努力をしたからである。

参考文献

橋口侯之介『和本への招待』（平成24年、角川選書）

橋本不美男『原典をめざして』（初版昭和49年、新装版平成20年、笠間書院）

山本信吉『古典籍が語る一書物の文化史』2004、八木書店

遠藤諦之輔『古文書修補六十年』（昭和62年、汲古書院）